

学位論文題名

地域形成メカニズムの変容と  
「内発的発展」に関する社会学的研究

学位論文内容の要旨

本論文は、序章及び第Ⅰ部（第2,3,4章）と第Ⅱ部（第5,6,7,8章）そして終章からなる論文と「文献一覧」「おわりに」をもって構成されている。

まず「序章」で氏は、日本における「内発的発展」概念、内発的発展論の批判的検討、および、諸外国における開発理論の成果を批判的に検討した。具体的には豊かな研究成果の伝統をもつ農村社会学、都市社会学、地域社会学の理論枠組みを踏まえ、その成果を活かした実態解明の方法を整理している。

第Ⅰ部理論編は以下の3つの章によって成り立っている。第2章「内発的発展論の理論的再構築に向けて—『内発性』、『発展』概念の再検討から」で、氏は日本における内発的発展論の批判的検討を踏まえ、内発的発展論の展開可能性を探っている。ここでは、日本における内発的発展論の展開過程を批判的に検討する中で、これまであまり問われることのなかった「内発性」と「発展」概念の詳細な検討から、近年の内発的発展論の諸問題が探られた。この検討から、「内発性」と「発展」を媒介し、「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念が、内発的発展論の理論的展開にとっての重要な鍵概念となることが明らかになった。

第3章「開発理論のオルタナティブとしての内発的発展論（1）—EU圏における内発的発展論の批判的検討から」では、日本における内発的発展論の展開が諸外国の開発理論の成果を十分に受けとめていないという問題に対して、「内発的発展」モデルの政策論的理論整備を進めるEU圏における内発的発展論の展開を批判的に検討しつつ、その応用可能性と限界が示された。EU圏における内発的発展論は、その政策論的志向ゆえに、近年の日本の地域開発の文脈と比較するうえで有益であり、日本の内発的発展論への応用可能性は否定できないものの、開発理論のオルタナティブ構築の面では不十分な部分が多いため、さらなる理論的検討作業が必要となる。

第4章「開発理論のオルタナティブとしての内発的発展論（2）—『開発』の言説批判と『開発』の規範理論の批判的検討から」では、近年の開発理論の主流としての、「開発」の言説批判を検討したうえで、その意義と付け加えるべきポイントが示された。具体的には、「開発」の規範理論の成果をもとに、植民地主義的性格、啓蒙主義的性格、西欧中心主義的性格など様々な問題点を指摘されている既存の開発理論のオルタナティブとしての内発的発展論の展開可能性が

探求された。

以上の第Ⅰ部における考察から、内発的発展論の原論ともいべき理論構築が行われる。ここでは、「内発的発展」概念の「内発性」という価値と、「発展」という目的に対して、この2つを媒介する第3項の重要性が指摘された。これは、「内発性」と「発展」を媒介し、「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念であり、この概念こそ、内発的発展論の理論的再生にとっての鍵概念となる。しかし、このままでは極めて抽象度が高いから、実際の地域社会の分析、および地域社会の「内発的発展」を追求するという実践的課題に向けては、地域社会の「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念の操作化が図られることになった。

この課題が、第Ⅱ部実証編で追求された。ここでは、「外来型開発」の典型ともいえる北海道、その中でも、国の開発政策、公共事業依存が強いとされ、「内発的発展」の条件としては極めて不利な条件を持つと考えられる、北海道道央大規模水田地域三市町村（新篠津村、北竜町、滝川市）が事例として取りあげられた。

第5章「農村地域における地域形成の変容と『内発的発展』（1）—道央三市町村における集団活動の比較分析から」では、集団活動に焦点を当てた地域社会学、都市社会学の理論枠組みの成果を踏まえつつ、「内発的」地域形成をとらえる分析枠組みが構築された。そのうえで、事例とされた三市町村における地域形成メカニズムの変容について、特に地域社会の「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」として重要な位置を占める集団活動、そのネットワーク形成の三市町村における特性を比較しつつ分析することから、近年の地域社会の変容が「内発性」に依拠した変動プロセスをとらえるべきか否かが論じられた。ここから、「内発的」な地域形成メカニズムの条件としての「社会的基盤」の一端が明らかにされた。

第6章「農村地域における地域形成の変容と『内発的発展』（2）—道央三市町村における『内発性』創出の『社会的基盤』」においては、より詳細な地域社会における「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」形成の文脈を、有機農業実践、農村女性グループ、農村—都市交流、新規就農の展開過程の分析から追求された。

第7章「農村地域における『内発性』創出プロセスと『内発的発展』—北竜町の事例から」では、地域社会の総合的な変動プロセスが分析された。事例としては、北竜町が取りあげられ、地域内ネットワークだけでなく、地域外ネットワークの重要性から、地域に閉じない「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」の可能性について詳細に論じられた。

第8章「地域社会における『地域文化』と『内発的発展』——『地域文化』研究の批判的検討から」は、「地域文化」の問題についての考察である。氏は日本における「地域文化」研究の動向と、「地域文化」に対する意味付与の歴史を概観した後に、それがどのように地域社会における「内発的発展」の問題とリンクするかという点を明らかにし、北竜町の事例の分析から、今後の内発的発展論の展開において重要と思われるポイントを明示した。

終章では、「内発性」の強調、および「内発的」とされる事例の過度なる一般化を控えて、「内発性」＝「発展」という図式の解体が指摘され、氏独自の「内発性」の存立条件、および「内発

性」と「発展」の関係性を的確に位置づける概念として、両者を媒介する第三項としての「社会的基盤」概念が新しく提起された。開発理論や、新自由主義的地域開発理論に還元されないように、「内発性」と「発展」を媒介し、「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念が精緻化された。「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念としては、地域に根ざした文化、伝統、生活スタイルを重視しつつ、地域に住まう人々の諸実践の蓄積と、その集団化、ネットワーク形成、諸機関の連携などが実態に即して活用された。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 金 子 勇  
副 査 教 授 松 岡 昌 則  
副 査 助 教 授 宮 内 泰 介

学 位 論 文 題 名

## 地域形成メカニズムの変容と 「内発的発展」に関する社会学的研究

本論文は、内発的発展論の理論的視座の確立と、地域社会における「内発的発展」という実践的課題に向けた、理論的かつ実証的アプローチの可能性を追求したものである。課題達成のために、氏は大きく分けて以下の2つの論点を研究している。

一つ目の特色は、「内発的発展」概念規定の問題を根底から問い直し、規範的理論として再構築するという理論的課題を、内外の文献を渉猟して追求したことにある。

二つには、地域社会が抱える諸問題に対して、内発的発展論がいかなる点で有効かを探る実践的課題を設定して、北海道の3市町村における詳細な社会調査を実施して、具体的な側面からの分析を試みた点が特筆できる。氏はそこで地域社会における「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」構築プロセスに関する理論的知見の獲得を目指そうとしたのである。

具体的に第I部理論編では、「内発的発展論の理論的再構築に向けて—『内発性』、『発展』概念の再検討から」と「開発理論のオルタナティブとしての内発的発展論—EU圏における内発的発展論の批判的検討から」が詳細に論じられた。氏は、経済発展に伴う近代化を目指す産業化論的近代化論を背景にした開発理論のオルタナティブとして、地域の主体性、発展プロセスの多様性を踏まえた規範的な理論としての性格を持っていた内発的発展論が、その批判的構想力を失い、しかも規範的な価値志向を失わせた要因は何か、さらにその再生の道筋は存在しうるのか、その新たな展開可能性について議論を試みている。

以上の第I部における考察から、内発的発展論の原論ともいべき理論構築が行われる。ここでは、「内発的発展」概念の「内発性」という価値と、「発展」という目的に対して、この2つを媒介する第3項の重要性が指摘された。これは、「内発性」と「発展」を媒介し、「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念であり、この概念こそ、内発的発展論の理論的再生にとっての鍵概念となる。しかし、このままでは極めて抽象度が高いから、実際の地域社会の分析、お

よび地域社会の「内発的発展」を追求するという実践的課題に向けては、地域社会の「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念の操作化が図られることになった。

まず「農村地域における地域形成の変容と『内発的発展』(1)——道央3市町村における集団活動の比較分析から」では、集団活動に焦点を当てた地域社会学、都市社会学の理論枠組みの成果を踏まえつつ、「内発的」地域形成をとらえる上での分析枠組みが構築された。次いで「農村地域における地域形成の変容と『内発的発展』(2)——道央3市町村における『内発性』創出の『社会的基盤』」においては、本研究の事例である「農村」にアプローチするうえで欠かすことのできない、農村社会学における理論枠組みを検討しつつ、内発的発展論の展開において重要と思われる分析枠組みが提示された。ここでの作業をもとに、より詳細な地域社会における「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」形成の文脈を、有機農業実践、農村女性グループ、農村—都市交流、新規就農の展開過程の分析から追求された。氏が主張された「社会的基盤」概念が全面的に応用されている。

同じく「農村地域における『内発性』創出プロセスと『内発的発展』——北竜町の事例から」では、地域社会の総合的な変動プロセスが分析された。事例としては、北竜町が取り上げられ、地域内ネットワークだけでなく、地域外ネットワークの重要性から、地域に閉じない「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」の可能性について詳細に論じられた。

全体的な視点からの「地域社会における『地域文化』と『内発的発展』——『地域文化』研究の批判的検討から」は、地域社会における「内発的発展」に関する問題を考えるうえで無視することのできない、「地域文化」の問題について考察がなされた。まず、日本における「地域文化」研究の動向と、「地域文化」に対する意味付与の歴史が概観された後に、それがどのように地域社会における「内発的発展」の問題とリンクするかという点が明らかにされ、北竜町の事例の分析から、今後の内発的発展論の展開において重要と思われるポイントが明記された。

以上の各章において、内発的発展論の理論的展開可能性、そして、実証的な理論枠組みとしての整備と、地域社会の「内発的発展」に向けてのより実践的な知見について、総合的な考察が試みられた。

もとより本論文にも問題点がないわけではない。「内発性」と「発展」を媒介する第三項としての、「内発的発展」の潜在力を高める「社会的基盤」概念は社会学対象そのものでもあり、その概念的な定義と操作概念化は今後とも精緻なレベルが要求されるところではある。しかし、従来あまり強調されることのなかった内発的発展論の理論的視座として、「社会的基盤」の意義を強調し、しかも比較社会学の手法で実証研究を積み上げた本論文の学術的な貢献の価値を損なうものではない。

以上の審査結果と入念な口頭試問結果を踏まえた審議から、本審査委員会は全員一致で本論文を博士(文学)に相応しいものとの結論に達した。